

自閉スペクトラム症児における感覚特異性と限局的反復行動との関連

森本 真央

【序論】限局的反復行動 (Restricted and Repetitive Behaviors: RRBs)は自閉スペクトラム症 (Autistic Spectrum Disorder: ASD) の中核的な症状の1つでありながら、あまり注目されてこなかった。感覚特異性もまた、ASD 児の多くに見られる症状であるが、周囲や本人ですらその症状に気づくことのできないケースも多く、ASD 児の日常生活における困難さを生み出してきた。これまでの先行研究で、ASD 児の RRBs の生起と感覚特異性との関連が報告されたが、どういった感覚特異性がどういった RRBs の生起と関連しているのかは、未だ明らかにはされていない。観察可能な RRBs の生起と感覚特異性の程度との関連を調べることは、ASD 児支援に役立つと考えられる。また、認知能力やコミュニケーション能力と RRBs の生起との関連も先行研究で示されている。このことから、感覚特異性以外の ASD 児の特性との関連も合わせて検討することで、RRBs の理解を深めるとともに、感覚特異性が RRBs の生起に与える影響を検討することができると考えた。本研究の目的は、幼児期の ASD 児の RRBs を実際の日常生活場面で定量的に評価することで、生態学的妥当性を高めながら、RRBs と感覚特異性等の個人特性との関連を検討することであった。

【方法】22名の ASD 児を対象児とした。児の RRBs を行動観察で評価した。観察場面は集団自由遊び場面で、個体追跡サンプリングを用いて、サンプル間隔 5 秒間の 1-0 サンプリング法で各児の、対自己 RRBs (児自身の中で完結し、対象が外に向かわないような限局的反復行動)、対物 RRBs (児の外側に存在する物体を介した限局的反復行動)、総合 RRBs (対自己 RRBs と対物 RRBs を合わせた行動)、の生起の有無を記録した。その後、各児における各行動の生起率 (%) を算出した。また、また、新版 K 式発達検査 2001 によって得られた全領域発達年齢、認知・適応発達年齢、言語・社会発達年齢そして感覚プロフィール短縮版によって得られた感覚特性得点、感覚過敏得点、感覚探求得点、また、共同注意尺度得点、自閉度を各自の個人特性として把握した。

【結果と考察】児の個人特性を説明変数として、各 RRBs に対して、重回帰分析を行った。その結果、感覚探求傾向の強さが総合 RRBs の生起率の高さの予測因子となるという結果となり、さらに、感覚探求の強さは、総合 RRBs の中でも対自己 RRBs の生起率の高さを予測する傾向が示唆された。このことより、感覚探求傾向の強い児は、より強い感覚刺激を求めるために、物を介した RRBs ではなく、直接自己に向かう RRBs を行うことで、自己の感覚刺激への欲求を満たしている可能性があると考えられた。また、社会コミュニケーション能力の低さが総合 RRBs の生起率を予測した。さらに、社会コミュニケーション能力の中でも、共同注意の能力の低さが対物 RRBs の高さを予測し、言語能力の低さが対自己 RRBs の生起率の高さを予測した。

感覚探求傾向の高さが高頻度の総合 RRBs を予測し、特に対自己 RRBs が予測される傾向が示され、また、社会コミュニケーション能力の低さが高頻度の総合 RRBs、対物 RRBs を予測し、また、高頻度の対自己 RRBs を予測する傾向にあったことから、児の感覚への興味を活かし、自己への直接の感覚刺激が得られる遊び (トランポリンなど) を中心とした遊びを支援者と児とで共有し、人との関わりを促進することを通して、社会コミュニケーション能力の発達を促すことが効果的ではないかと考えられる。(比較発達心理学)